

順に選択させ、得点化（1位：7点～7位：1点）した。二要因（テスト間×性）分散分析の結果、捕球および嗜好において、テスト間に有意な主効果が認められた（ $P < 0.01$ ）。いずれも Pre-test に比べて Post-test の方が優れた値を示した。捕球における指導効果に有意な性差は認められず、指導効果が男女同様にあったことが窺われた。また、指導後の嗜好において男児の方が高い値（男児：5.7点、女児：4.1点）を示した。以上の結果から、本プログラムにおける指導効果は、捕球において性差はなく、ボール遊びに対する嗜好においては男児の方がより指導効果があったことが明らかとなった。

第1体育館
8月28日
10:00

発28-105

幼児期における女児の走動作の縦断的变化 年少時から年長時までの追跡調査にもとづいて

○山本 紗綾（岐阜大学大学院）
香村 恵介（京都文教短期大学）

春日 晃章（岐阜大学）

本研究は、女児の幼児期における疾走能力を3年にわたり縦断的に分析し、キネマティクスの変化を検討することを目的とした。対象は年少時に113名の中から25m走のタイムに従って抽出した、疾走能力の高い群（以下、上位群）各5名および疾走能力の低い群（以下、下位群）各5名の合計10名とし、同じ対象者を1年後、2年後に再び撮影した。撮影にはハイスピードモードを兼ね備えた4台のカメラ（CASIO EX-F1）を使用した。Frame-DIAS IV（DKH社製）を使用し、左足離地から次の左足離地までの1サイクルを毎秒100コマでデジタル化し、DLT法により三次元座標を算出した。分析にはスピアマンの順位相関係数の検定を適用した。また、担任教諭に対象児の遊び習慣に関するアンケート調査を毎回行った。分析の結果、ストライドは年少期と年中期及び年中期と年長期の間において高い相関関係がみられた。ピッチは年少期と年長期及び年中期と年長期において高い相関関係がみられた。また、アンケート結果から日常生活の遊び習慣の違いが年少時期から窺えた。上位群は下位群と比較すると、頻繁に運動遊びを行っており、これが走動作の獲得に影響を与えている一要因であると推察された。

発

第1体育館
8月28日
10:00

発28-106

未就園2歳児の身体活動量に関連する要因の検討 保護者の意識および行動に着目して

○香村 恵介（京都文教短期大学）

春日 晃章（岐阜大学）

3歳頃までの身体活動量（PA）が多い幼児は高体力であることが報告されている（文部科学省、2011）。そのため、2歳時から十分なPAを確保することが活動的な子どもを育むために重要である。本研究は保護者の意識・行動と子どものPAとの関連を検討することを目的とした。対象は週1回幼稚園の未就園児クラスに登園している29名（ 2.96 ± 0.23 歳）であった。ライフコーダGSを2週間子どもの腰部に装着させ、平日および土日の歩数を計測した。また、保護者の意識・行動に関するアンケート調査を行った。結果、父親が子どもと運動遊びをすることが好きなほど子どもの土日の歩数が多く（ $r=.388$ ）、移動時に保護者が子どもを抱く頻度が高いほど子どもの土日の歩数が少なかった（ $r=-.484$ ）。また、子どもの日焼けを気にする保護者の子ども（平均10361±2623歩）は、気にしない保護者の子ども（12713±2273歩）に比べて平日の歩数が有意に少なかった。さらに、保護者の思う子どもの理想の歩数と実際の子どもの歩数には平日（ $r=.429$ ）、土日（ $r=.498$ ）共に有意な関連が認められた。